

養護実習生のストレスに関する研究 (Ⅱ)

—実習ストレスとソーシャル・サポートの関係—

有 村 信 子

On the Stress in the Practice for the College Students of School Nurse-Teacher Course (Ⅱ)
: The Relation between the Stressors and Social Support

Nobuko Arimura

研究 (Ⅰ) では、養護実習において学生が受けるストレスの内容分析を行い、構造的に把握した結果、実習ストレスは養護技術的なものに起因するより、周囲の期待や教師との関係など心理的なものに起因することが明らかになった。

そこで、本研究は、この実習ストレスの個人差に着目し、同じ条件の実習であっても高いストレスを示した学生と低いストレスを示した学生との違いを、彼らのソーシャル・サポート (社会的関係性) の有り様とその関係を分析した。なお、サポート内容は情緒的サポート 3 項目と道具的サポート 3 項目とした。サポート源は、養護教諭、児童生徒、実習生・友人、家族、短大関係者であった。その結果、各サポート内容およびサポート源において、高サポート群と低サポート群間でストレス得点を比較すると、全 6 因子中、第 5 因子の「評価されることへの負担」以外のすべての因子で、高サポート群においてストレスの低下が明らかになった。すなわち、実習生のソーシャル・サポートが彼らの実習ストレスを低減する効果を持つことが示された。

Key words: [ソーシャル・サポート] [情緒的サポート] [道具的サポート]
[養護実習]

(Received November 6, 2000)

目 的

養護実習の期間中に実習生が体験する多くの出来事は、実習生に様々な対処を要求し、その連続はときに大きなストレスをもたらすことが予想される。一方、ストレスを低減させるのに有用なものとして、健康や知識、問題解決の技能、ソーシャル・サポート等が挙げられる。とりわけ、ソーシャル・サポート (何かあったとき、困ったときに、自分を取り巻く重要な他者からさまざまな形の援助が得られるということ) という概念が非常に注目され、数多くの研究がなされている。例えば、福岡ら (1997) は、大学生と成人を対象にした研究で、ソーシャ

ル・サポートが有効であることを実証している。また、教育実習のストレスに関して、特に、ソーシャル・サポートの視点から多くの研究がなされている。例えば、音山ら(1997)は、教育実習中にこのようなサポータティブな関係にあることは、ストレスの経験頻度を低減する一定の効果をもつことを明らかにしている。

ところで、教育学部の学生は、学部の附属となる小・中学校等へまとまった人数で教育実習に行くことが一般的であるが、養護実習では学生のほとんどが1校に1人の実習生となる特異的な体験となる。さらに、これまでの養護実習のストレスに関する研究は、一般の教育実習に比較して必ずしも十分でない。

筆者は前回の研究(有村,1999)で、学生が養護実習中に感じる実習ストレスの内容分析を行い、構造的に把握することを目的とした。その結果、第1因子「養護教諭になることへの期待に対する負担」、第2因子「教師たちの態度に対する否定感情」、第3因子「未熟な養護技術に対する不安」、第4因子「保健指導に対する自信のなさ」、第5因子「評価されることへの負担」、第6因子「養護実習への適応の不安」の6因子が得られた。各因子の強さは、養護実習の校種や実習内容、保健室登校児童生徒の有無等にかかわることが明らかにされた。さらに、実習生にとって脅威となるストレスが養護技術的なものに起因するより、周囲の期待や教師との関係など心理的なものに起因することが明らかになった。したがって、養護実習中の実習生のストレス内容が、心理的であればあるほど彼らのサポータティブな人間関係が、そのストレスの高低に非常に影響を及ぼすであろうことが推測される。

そこで、本研究は、この実習ストレスの個人差に着目し、同じ条件の養護実習であっても高いストレスを示した学生と低いストレスを示した学生との違いが、実習中における彼らのソーシャル・サポートの有り様と、どのように関係していたのかを分析することを目的とする。

方 法

1 調査対象

鹿児島純心女子短期大学学生(生活学科養護コース)2年 66名

2 調査期日

この調査は、養護実習終了後、最初の養護実習の講義(実習終了後4日以内)である1999年6月24日、7月1日の2回に分けて、調査用紙を配布し、無記名・自己記入式で実施した。なお、1999年度の養護実習(3週間)は、実習校の都合により実習開始が5月31日と6月7日に分かれて行った。

3 調査項目

ソーシャル・サポートの測定における重要な変数の1つに、だれとの関係におけるサポートなのかというサポート源の問題と、どのようなサポート内容であったかの問題がある。個人にとってサポートの送り手(サポート源)は、その性質によっていくつかのカテゴリーに分類される。本研究では、学校における養護実習であることから「実習校の養護教諭」、「実習校の児童生徒」、「実習生・友人」、「家族」、「短大関係者」の5つのサポート源を想定した。

また、サポート内容として、福岡・橋本(1993)の尺度を参考に、6項目作成した。情緒的

サポートとして、「実習内容について、指導や助言をしてくれる（アドバイス・助言）」、「笑わせたり、元気づけたりしてくれる（なぐさめ・励まし）」、「親身になって話を聞いてくれる（受容・共感）」の3項目と、手段的サポート（道具的サポート）として、「保健行事や救急処置を手伝ってくれる（指導場面等での援助）」、「児童生徒のことについて、いろいろ教えてくれる（情報提供）」、「保健指導案や教材の作成を手伝ってくれる（準備場面での援助）」の3項目とした。これら6項目について、「してくれる」、「ややしてくれる」、「ややしてくれない」、「してくれない」の4段階で評定させた。

結果及び考察

養護実習が終了して、実習中に体験したストレスに対して、「実習校の養護教諭」、「実習校の児童生徒」、「実習生・友人」、「家族」、「短大関係者」のそれぞれのサポート源から6項目のサポート内容に対して、「してくれる」から「してくれない」と回答した順に4, 3, 2, 1点と得点化した。また、「してくれる」、「ややしてくれる」と回答したものを高サポート群, 「ややしてくれない」、「してくれない」と回答したものを低サポート群の2つに分けた。

I サポート源ごとの分析

1 サポート源：実習校の養護教諭

① 実習内容について、指導や助言をしてくれる

第1因子「養護教諭になることへの期待に対する負担因子」の平均得点（得点が高いほど高ストレス）は、高サポート群の方が低サポート群より有意に低い($t=2.576$, $df=64$, $p<.05$) (Fig. 1参照)。第1因子のストレスは、養護教諭との関係（ソーシャル・サポート）の有様で明らかに異なる。すなわち、実習校の養護教諭が自分を支えてくれていると実感している実習生は、養護教諭になることへの期待に対する負担が低い。

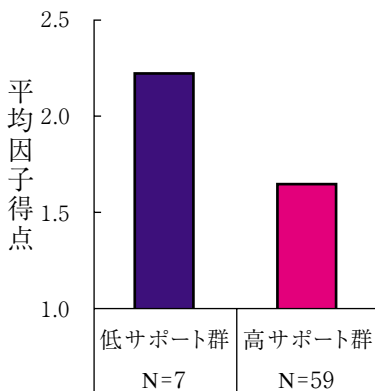


Fig. 1 養護教諭のアドバイス・助言と第1因子との関係

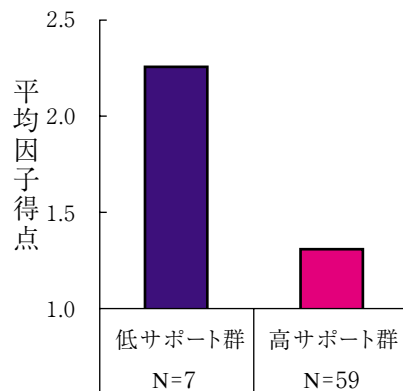


Fig. 2 養護教諭のアドバイス・助言と第2因子との関係

第2因子「教師たちの態度に対する否定感情」で、有意な差があり($t=2.769$, $df=6.174$, $p<.05$), 第2因子も同様に、実習校の養護教諭が支えてくれていると実感している学生の方が、実感していない学生より教師たちの態度に対する否定感情が低い (Fig. 2 参照).

② 保健行事や救急処置を手伝ってくれる

第2因子で有意な差があり($t=2.957$, $df=6.496$, $p<.05$), 実習校の養護教諭が、保健行事や救急処置の未熟な部分を手伝ってくれていると感じている学生は、そう感じていない学生よりも教師たちの態度に対する否定感情が低い (Fig. 3 参照).

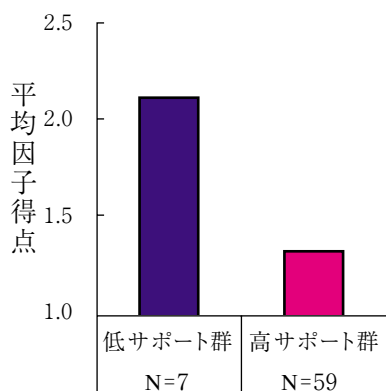


Fig. 3 養護教諭の指導場面等での援助と第2因子との関係

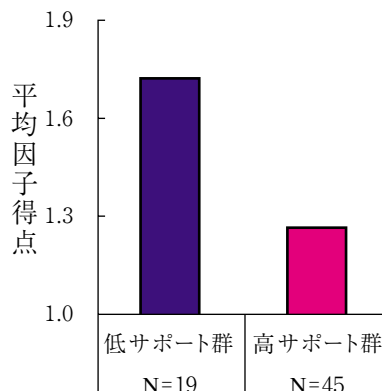


Fig. 4 養護教諭の準備場面での援助と第2因子との関係

③ 笑わせたり、元気づけてたりしてくれる

実習校の養護教諭が、笑わせたり元気づけてたりしてくれたか否かは、ストレスの高低に関係しないことが明らかになった。

④ 児童生徒のことについて、いろいろ教えてくれる

全員が高サポートであったため、比較することができない。

⑤ 保健指導案や教材の作成を手伝ってくれる

第2因子で有意な差があり($t=2.674$, $df=20.240$, $p<.05$), 養護教諭が保健指導案や教材の作成を手伝ってくれていると感じている学生は、そう感じていない学生より教師たちの態度に対する否定感情が低い (Fig. 4 参照).

第4因子「保健指導に対する自信のなさ」で有意な差があり($t=2.237$, $df=62$, $p<.05$), 養護教諭が保健指導案や教材の作成を手伝ってくれていると感じている実習生は、そう感じていない実習生より、保健指導に対するストレスが低い (Fig. 5 参照).

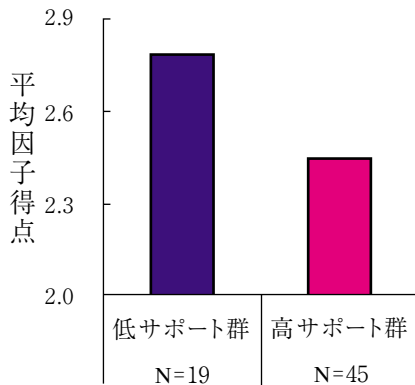


Fig. 5 養護教諭の準備場面での援助と第4因子との関係

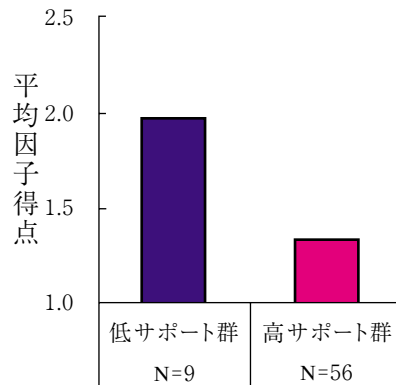


Fig. 6 養護教諭の受容・共感と第2因子との関係

⑥ 親身になって話を聞いてくれる

第2因子のみ有意な差がある傾向にあり($t=2.005$, $df=8.292$, $p<.10$), 親身になって話を聞いてくれていると感じている実習生は、そう感じていない実習生より教師たちの態度に対する否定感情が低い (Fig. 6 参照)。

このように、実習生は、実習校の指導者である養護教諭の態度が、好意的（支援的）であるか、拒否的であるかに敏感に反応している。養護教諭に支えられていると感じている実習生とそう感じていない実習生は、第1因子「養護教諭になることへの期待に対する負担因子」、第2因子「教師の態度に対する否定感情因子」、第4因子「保健指導に対する自信のなさ因子」で差があり、高サポートにおいてストレスが低いことが明らかになった。

2 サポート源：実習校の児童生徒

① 実習内容について、指導や助言をしてくれる

このことについては、すべて有意な差がみられなかった。

② 保健行事や救急処置を手伝ってくれる

第2因子で有意な差がある傾向にあり($t=1.832$, $df=62$, $p<.10$), 児童生徒が保健行事で物品の運搬や整列などに協力したり、救急処置で手伝ったりしてくれていると感じている実習生は、そう感じていない実習生よりも教師たちの態度に対する否定感情が低い (Fig. 7 参照)。

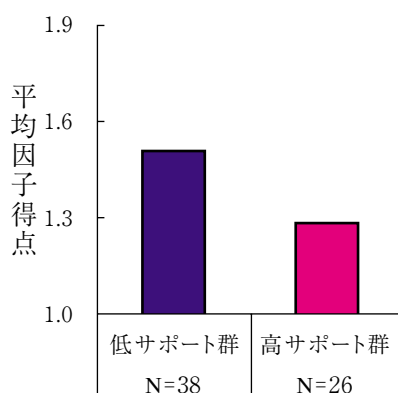


Fig. 7 児童生徒の指導場面等での援助と第2因子との関係

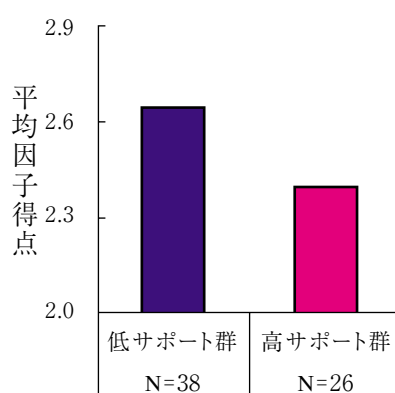


Fig. 8 児童生徒の指導場面等での援助と第4因子との関係

第4因子で有意な差がある傾向にあり($t=1.704$, $df=62$, $p<.10$), 児童生徒が手伝ってくれていると感じている実習生は, そう感じていない実習生よりも保健指導に対するストレスが低い (Fig. 8 参照).

第6因子「養護実習への適応の不安」で有意な差があり($t=2.027$, $df=62$, $p<.05$), 同様に児童生徒が手伝ってくれていると感じた実習生は, そう感じていない実習生よりも養護実習へのストレスが低い (Fig. 9 参照).

- ③ 笑わせたり, 元気づけたりしてくれる
- ④ 児童生徒のことについて, いろいろ教えてくれる
- ⑤ 保健指導案や教材の作成を手伝ってくれる
- ⑥ 親身になって話を聞いてくれる

これら③から⑥は, すべてなんら有意の差がみられなかった.

このように, 実習校の児童生徒が保健行事や救急処置において, 手伝ってくれていると感じている実習生とそう感じていない実習生とは, 第2因子「教師たちの態度に対する否定感情因子」, 第4因子「保健指導に対する自信のなさ因子」, 第6因子「養護実習への適応の不安因子」に差があり, 高サポートにおいてストレスが低いことが明らかになった.

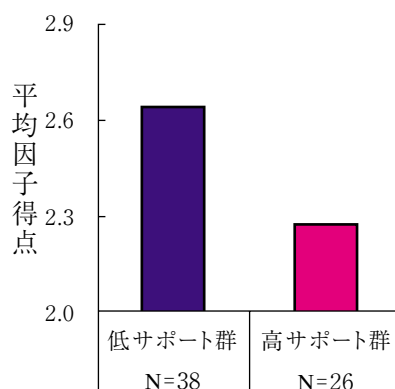


Fig. 9 児童生徒の指導場面等での援助と第6因子との関係

3 サポート源：実習生・友人

① 実習内容について、指導や助言をしてくれる

第4因子で有意な差があり($t=2.178, df=63, p<.05$)、実習生や友人が実習内容について助言等をしていてと感じた実習生は、そう感じていない実習生より保健指導に対するストレスが低い (Fig.10参照)。

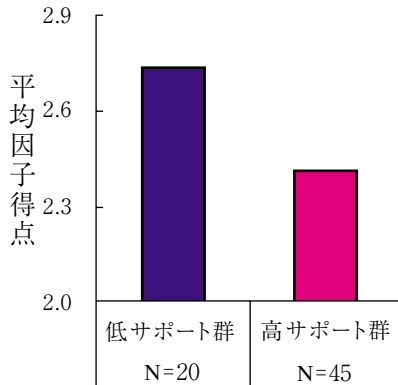


Fig.10 実習生・友人のアドバイス・助言と第4因子との関係

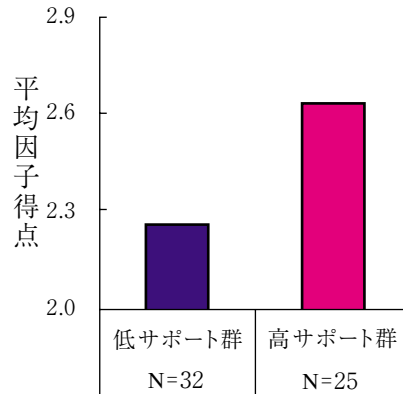


Fig.11 実習生・友人の準備場面での援助と第6因子との関係

- ② 保健行事や救急処置を手伝ってくれる
- ③ 笑わせたり、元気づけたりしてくれる
- ④ 児童生徒のことについて、いろいろ教えてくれる

これら②から④は、すべて有意の差がみられなかった。

⑤ 保健指導案や教材の作成を手伝ってくれる

第6因子で有意な差がある傾向にあり($t=1.772, df=40.518, p<.10$)、実習生や友人からの援助を感じている実習生は、援助を感じていない実習生より養護実習へのストレスが高い。この意味を述べるとすれば、同じ実習生から手伝ってもらうことで、プライドが傷つきストレスが高まったという可能性を示しているとも考えることもできる (Fig.11参照)。

⑥ 親身になって話を聞いてくれる

なんら有意の差はみられなかった。これは、実習生同士がお互いに実習そのものや実践記録などに追われ、時間的余裕がないのか、また、実習校において一人のみの実習生が多いためとも考えられる。

このように、他の実習生が自分の経験したこと等に基づいて、実習内容に関する指導や助言をしていてと感じている実習生は、保健指導に対するストレスを低くしているが、実際に保健指導案や教材の作成を手伝ってくれることは、養護実習そのものへのストレスを逆に高めている。さらに、青年期のストレスの緩和において、「友人からの情緒的サポート」が効果的であることがしばしば指摘されているが、この研究では、「実習生・友人」の特に情緒面の効果が明らかでなく、養護実習の形態が関わっている可能性を示しているとも考えられる。

4 サポート源：家族

① 実習内容について、指導や助言をしてくれる
このことについては、なんら有意の差がみられなかった。

② 保健行事や救急処置を手伝ってくれる

第3因子「未熟な養護技術に対する不安因子」で有意な差があり($t=2.248$, $df=48$, $p<.05$)、家族からのサポートを感じている実習生は、サポートを感じていない実習生より未熟な養護技術に対する不安が低い。実際の実習場面において直接サポートすることができないので、場合によっては、家族が保健行事や救急処置の練習台になってくれた可能性がある (Fig.12参照)。

③ 笑わせたり、元気づけたりしてくれる

④ 児童生徒のことについて、いろいろ教えてくれる

これら②と③は、すべてなんら有意な差はみられなかった。

⑤ 保健指導案や教材の作成を手伝ってくれる

第2因子で有意な差がある傾向にあり($t=1.974$, $df=52$, $p<.10$)、家族からのサポートを感じている実習生は、サポートを感じていない実習生より教師たちの態度に対する否定感情が高い (Fig.13参照)。

第6因子で有意な差がある傾向にあり($t=1.691$, $df=52$, $p<.10$)、家族からのサポートを感じている実習生は、サポートを感じていない実習生より養護実習へのストレスが高い。家族に保健指導案や教材の作成を手伝ってもらったのは、本人のプライドが傷ついたのか、自信がかえってなくなったという可能性を示していると考えられる (Fig.14参照)。

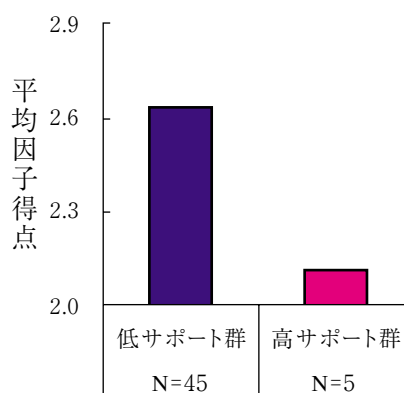


Fig.12 家族の指導場面等での援助と第3因子との関係

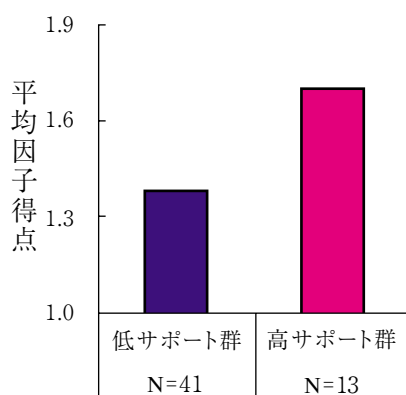


Fig.13 家族の準備場面での援助と第2因子との関係

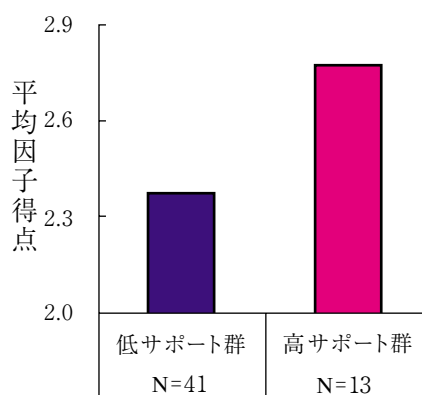


Fig.14 家族の準備場面での援助と第6因子との関係

⑥ 親身になって話を聞いてくれる

家族が、親身になって話を聞いてくれたか否かは、ストレスの高低になんら関係しないことが明らかになった。

このように、家族が保健行事や救急処置を手伝ってくれていると実感した実習生は、そう感じなかった実習生より未熟な養護技術に対する不安が低い。一方、家族が保健指導案や教材の作成を手伝ってくれていると感じている実習生とそう感じていない実習生は、第2因子「教師たちの態度に対する否定感情因子」、第6因子「養護実習への適応の不安因子」に差があり、高サポートにおいてストレスが高いというこれまでとは逆の結果が得られた。

5 サポート源：短大関係者

① 実習内容について、指導や助言をしてくれる

第4因子で有意な差がある傾向にあり($t=1.755$, $df=53$, $p<.10$)、アドバイスや助言を感じている実習生は、そう感じていない実習生より保健指導に対するストレスが低い。短大関係者のサポートがストレス低減に関わっていることが明らかである (Fig.15参照)。

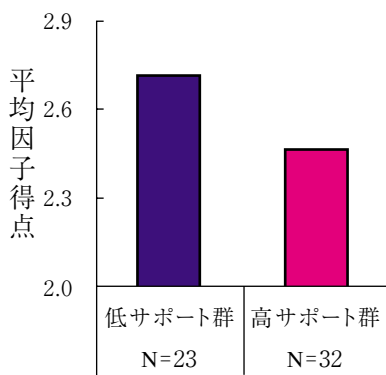


Fig.15 短大関係者のアドバイス・助言と第4因子との関係

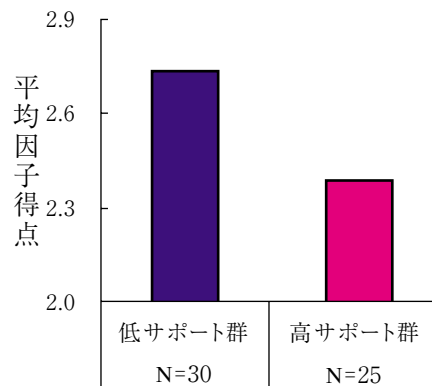


Fig.16 短大関係者のなぐさめ・励ましと第4因子との関係

② 保健行事や救急処置を手伝ってくれる

このことについては、すべてなんら有意差がみられなかった。

③ 笑わせたり、元気づけたりしてくれる

第4因子で有意差があり($t=2.560$, $df=53$, $p<.05$)、笑わせたり、元気づけたりしてくれるのを感じている実習生は、感じていない実習生より保健指導に対するストレスが低い (Fig.16参照)。

④ 児童生徒のことについて、いろいろ教えてくれる

第3因子で有意な差がある傾向にあり($t=1.926$, $df=49$, $p<.10$)、短大指導者のサポートを受けていると実感している実習生は、そう感じていない実習生より未熟な養護技術に対する不安が低い (Fig.17参照)。

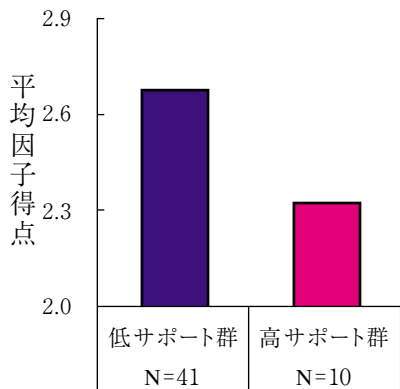


Fig.17 短大関係者の情報提供と第3因子との関係

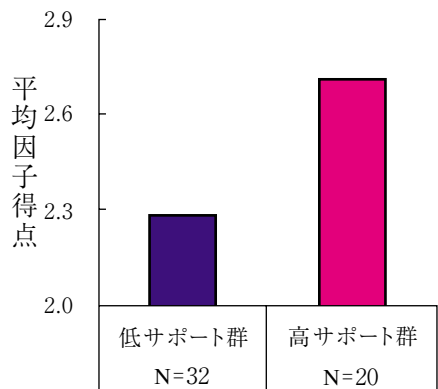


Fig.18 短大関係者の準備場面での援助と第6因子との関係

⑤ 保健指導案や教材の作成を手伝ってくれる

第6因子で有意な差がある傾向にあり($t=1.931$, $df=32.229$, $p<.10$), サポートを実感している実習生は, サポートを感じていない実習生より養護実習へのストレスが高い (Fig.18参照). サポートをやり過ぎると, 実習生はプライドを傷つけられると思われる可能性がある.

⑥ 親身になって話を聞いてくれる

短大関係者が, 親身になって話を聞いてくれたか否かは, ストレスの高低になんら関係しないことが明らかになった.

このように, アドバイス, 励ましや情報提供などのサポートによって短大関係者から支えられていると感じる実習生は, そうでない実習生よりストレスが低いことが明らかになった. 一方, 短大関係者が保健指導案や教材の作成といった準備場面での援助をし過ぎることは, 実習生のプライドを傷つけ, ストレスを高めることとなった.

II サポート源相互の比較

これまで, サポート源ごとに分析してきたが, サポート源の違いにより同じサポート内容であっても, その効果がみられたものとみられなかったものがあり, それらをより明らかにするために一覧表にまとめた (Table 1 参照).

Table 1 各サポート源の比較

サポート内容/サポート源	実習校の養護教諭	実習校の児童生徒	実習生・友人	家族	短大関係者
①実習内容について, 指導や助言をしてくれる	第1*・第2*		第4*		第4+
②保健行事や救急処置を手伝ってくれる	第2*	第2+・第4+・第6*		第3*	第4*
③笑わせたり, 元気づけたりしてくれる					第3+
④児童生徒のことについて, いろいろ教えてくれる			(第6+)	(第2+・第6+)	(第6+)
⑤保健指導案や教材の作成を手伝ってくれる	第2*・第4*				
⑥親身になって話を聞いてくれる	第2+				

+ $p<.10$

* $p<.05$

数値: 因子番号

各サポート内容およびサポート源において、高サポート群と低サポート群間にストレス得点の差がみられた因子は、Table 1 のとおりである。Table 1 中の（ ）を付与した因子以外の因子は、高サポート群においてストレスの低下が認められた。一方、（ ）を付与した因子については、高サポートにおいて逆にストレスの増加が認められた。

養護実習は、実習生が実習校から提示された計画に従って、実習項目（行事や指導等）を実践していくわけだが、実習生が実習項目に対して自主的に取り組むには慣れない環境の中で限度があると思われる。また、実習生にとって1つ1つの実習項目を実践していくには、指導者の適切なサポートがなければできないことが予想される。このような中で、実習生が実習校の養護教諭と短大関係者から受けたと感じているサポートによってストレスが低減されたのは、養護教諭の職務を指導する同じような立場からのサポートであり、その傾向が似通っていると思われる。しかし、そのわずかの違いは、実習中いつも身近にいる養護教諭からのサポートと実習が終わって夜電話をかけたり、週末に短大に出かけたりしてサポートを受けることとの違いを示しているとも考えられる。一方、実習校の児童生徒から受けたと感じているサポートに有意な差がみられたのは、指導場面等での援助のみであったが、これは実習生が教師として児童生徒の前に立つことを意識している結果と思われる。また、実習生・友人からのサポートは、アドバイス・助言のみで有意差がみられ、従来の教育実習における研究と同様の実習生同士の支え合いによるサポート効果はみられなかった。

家族からのサポートは、指導場面等や準備場面での道具的サポートにおいて有意の差がみられた。これは一般に日常生活ストレスにおいても家族からのサポートは道具的サポートが中心であるといわれていることから予想されたことである。

ま と め

本研究で得られた結果を要約すると、以下のようになる。

1 指導者である養護教諭のサポート

実習内容について養護教諭が指導や助言をしてくれると感じている実習生は、ストレスが低く、親身になって話を聞いてもらっていると感じている実習生はストレスが低いことから、養護教諭と実習生とのサポートイブな人間関係が確保されることはもちろんのこと、今後の養護実習において情緒的サポートを期待したい。

2 児童生徒のサポート

児童生徒が、保健行事や救急処置を手伝ってくれることのみストレス低減の効果がみられた。教師としての姿勢をとる実習生にとっては、予想された結果であると思われる。

3 実習生・友人のサポート

実習生や友人からのサポートによる有意差はあまりみられなかった。同一校に実習生がいなか、また、時間的余裕もなかったかと思われる。なお、保健指導案や教材の作成など「代わりにしてあげる」サポートは、一部のストレスをかえって高めてしまうことが明らかになった。

4 家族のサポート

種々のサポートを受けるなかで、道具的サポートがストレスを低減させる効果がある反面、

高めるものも存在した。家族が練習台になったり、準備を手伝ったりするなかで、実習生に対して否定的な言葉や態度を取らないことは、彼らの実習に対する自信をつけさせることにつながると思われる。

5 短大関係者のサポート

保健指導案や教材の作成といった代行のサポートは、一部のストレスをかえって高めてしまうというネガティブな効果をもたらした。緊張と不安のなかで過度の負荷にどう対処しようか悩んでいる実習生にとって、3週間の実習期間の途中で1回実習生を短大に集めて情報交換を行ったり、おしゃべりしたりすることは、情緒的サポートにつながると考えられる。

養護実習という非日常的で過度の負荷がかかるなか、個々のサポート源において得られる各種のサポートは、ポジティブな意味合いをもつものと考えていたが、時にはネガティブな効果をもたらすことが明らかになった。今後は、ソーシャル・サポートが機能しているかの機能面だけでなく、人間関係づくりがスムーズにできないといわれる子どもたちにとって、サポートがやり取りされる対人関係についても検討していく必要がある。

参考文献

- 有村信子：養護実習を通した学生の意識の変化，鹿児島純心女子短期大学研究紀要，28，47-53，1998
- 有村信子：養護実習生のストレスに関する研究（Ⅰ）—実習ストレスの分析—，鹿児島純心女子短期大学研究紀要，30，31-41，2000
- 福岡欣治・橋本宰：大学生における家族および友人についての知覚されたサポートと精神的健康の関係，教育心理学研究，43，185-193，1995
- 福岡欣治・橋本宰：大学生と成人における家族と友人の知覚されたソーシャル・サポートとそのストレス緩和効果，心理学研究，68，403-409，1997
- 保健体育審議会：生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興のあり方について（答申），保健体育審議会，28-29，1997
- 勝倉孝治・田中輝美・杉江征・山元奨・山際勇一郎：小，中学校教師の学校ストレスに関する研究(2)—教師用ストレス尺度作成の試み—，日本教育心理学会第38回総会発表論文集，258，1996
- 古屋健・坂田成輝・音山若穂：心理的ストレス・モデルに基づくストレスの分析—理論的意義と教育実習ストレスの実証的検討—，群馬大学教育学部紀要，46，461-479，1997
- 古屋健・音山若穂・坂田成輝：教育実習生のストレスに関する研究Ⅳ—1，—ソーシャル・サポート尺度の構成—，日本教育心理学会第39回総会発表論文集，281，1997
- 栗山容子：中等教育における教育実習生の自己評価尺度の検討，教育心理学研究，44，322-331，1996
- 教育科学研究会編集：教育「中教審答申をどう読むか」，国土社，605，1996
- 宗像恒次：行動科学から見た健康と病気，メヂカルフレンド社，1996
- 内外教育：教育課程審議会（審議のまとめ），時事通信，4929，12-66，1998
- 永岑光恵・中村菜々子：大学生の試験期ストレス過程に関する研究，心理学研究，70，455-461，2000
- 日本学校保健学会「養護教諭養成教育のあり方」共同研究班：養護実習，これからの養護教諭の教育，東山書房，90-95，1990
- 岡安孝弘・島田洋徳・坂野雄二：中学生におけるソーシャル・サポートの学校ストレス軽減効果，教育心理学研究，41，302-312，1993
- 大野木裕明・宮川充司：教育実習不安の構造と変化，教育心理学研究，44，454-462，1996

- 音山若穂・古屋健・所澤潤：教育実習生のストレスに関する基礎的研究Ⅲ，群馬大学教育実践研究，13，225-238，1996
- 音山若穂・坂田成輝・古屋健：教育実習生のストレスに関する研究Ⅳ－2－サポートとストレッサーとの関係一，日本教育心理学会第39回総会発表論文集，282，1997
- 坂田成輝・音山若穂・古屋健・所澤潤：教育実習生のストレスに関する基礎的研究Ⅱ，群馬大学教育実践研究，12，243-256，1995
- 坂田成輝・古屋健・音山若穂：教育実習生のストレスに関する研究Ⅳ－3－ソーシャル・サポートとストレス反応の関係一，日本教育心理学会第39回総会発表論文集，283，1997
- 佐藤和子・松浦英治・藤盛真佐紀・熊野佳子・水島和美：養護教諭養成課程学生の臨床実習中における生活と疲労について，第41回日本学校保健学会講演集，301，1994
- 嶋信宏：大学生のソーシャルサポートネットワークの測定に関する一研究，教育心理学研究，39，440-447，1991
- 浦 光博：支えあう人と人－ソーシャル・サポートの心理学－，サイエンス社，1993
- 和田 実：大学新入生の心理的要因に及ぼすソーシャルサポートの影響，教育心理学研究，40，386-393，1992
- 和田 実：大学生のストレスへの対処，およびストレス，ソーシャルサポートと精神的健康の関係－性差の検討一，実験社会心理学研究，38，193-201，1998